IS怪異を追ったらここにいた

シャル＆ラウラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ怪異を追ったらここにいた

【Ｎコード】
Ｎ９１４５Ｘ

【作者名】
シャル＆ラウラ

【あらすじ】
シャル＆ａｍｐ；ラウラ［初心者です］

シャル［つまらないよ］

ラウラ［つまらんな］

シャル＆ａｍｐ；ラウラ［ひ、酷い…］

ここどこ？（前書き）

シャル［作者の妄想だけど］
ラウラ［温かく見守ってくれ］
シャル&ラウラ［とにかく頑張りますよ（涙）］

ここどこ?

皆さん、こんにちは（・∀・）ノ　若干現実逃避している阿々木暦です。

今、知らない女性8人に刀や銃を向けられて居ます…どうしてこうなった?

ちなみに、隣で気を失っているのが僕の彼女、戦場ヶ原である。

この状況に至までの経緯をまとめてみよう…

今まで音信不通だった忍野からの一通の手紙と銀色の指輪と金色の指輪が送られてきた。手紙の内容は「今、ある怪異の調査にこの町に来ている、協力を願いたい、ついましてはツンデレちゃんと一緒にあのビルの屋上に来てくれ、勿論指輪も忘れずに」との事だった。

ここどこ？（後書き）

感想＆amp;アドバイスお待ちしています

あのお節介めがぁぁぁ！（前書き）

シャル&ラウラ「文才と知識がほしい」

シャル「頑張ってね」

ラウラ「ふん軟弱ものがぁ」

あのお節介めがぁぁぁ！

ここに来るのはブラック羽川事件以来か…

僕は言われたと通りに戦場ヶ原と一緒にビルの屋上にいた。

暦「忍野どこだぁ？言われたと通りに来たぞぉ！」

忍野「やあやあ、久しぶりだねぇ、随分と元気がいいねぇ。何かいいことでもあったのかい？」

暦「そのセリフを聞いたの久しぶりだな、元気そうだな」

忍野「まね、そっちは前よりラブラブみたいだねぇ」

ひたぎ「忍野さん久しぶりです。それと、貴方が考えている以上に私たちはラブラブです。」

暦（…そこまで堂々と言われると恥ずかしいな…）

忍野「まぁ、何にせよ仲が良いのは良いことだよ」

暦「で？怪異関係でこんな手紙送ってきたんだろ？」

忍野「君って本当に変わらないなぁ、人間急いだっていいことないよ、もっと辛抱しなきゃ」

暦「お前がマイペースすぎるんだろ！」

ひたぎ「そうよ阿良々木君、草食系男子を気取るのもいいけれど、草ばっかり食べてると、枯れるわよ」

暦「話が完璧に脱線したな」

忍野「それはそうと、忍ちゃんは元気かい？」

暦「元気だよ、顔見るか？」

忍野「いや、元気だってわかればいいよ、早速だけど金色の指輪を阿良木君に、銀色の指輪をツンデレちゃんにつけてこっちに来てくないか？」

暦「分かった」

数分後…

暦「これって婚約指輪に似ている気がするんだが…」

ひたぎ「そうね、似合ってるわよ、阿良々木君」

暦「戦場ヶ原も似合ってるぞ／／」

忍野「お、来たねそれじゃぁ、あれが今回の怪異、神隠しだよ」

暦「え、あのビルの下にカバみたいにデカい口を開けている奴か？」

忍野「そうだよ、それじゃ（ニヤリ）お二人様ご案内」

暦&ひたぎ「「え、ええええええええええええ……」」

暦「で、今の現状に戻る」

あのお節介めがぁぁぁ！（後書き）

感想＆アドバイスください

やっちゃったなぁ（前書き）

作者「作者も忘れていたあの子の登場です」

シャル「最低だね」

ラウラ「最低だな」

作者「反省してま～す」

やっちゃったなぁ

???「お前たち、こんなところで何をしている」

黒髪で背が高いスーツ姿の女性に不意に声をかけれらた。

暦「気づいたら僕達はここにいた」

（まさか怪異（忍野の陰謀）にあってここに来ましたなんて言えねいよな）

???「そうか、君達武器を下してもいいぞ、私は織斑千冬、ここIS学園の教師をしてしている」

暦「えっと、織斑さんお願いがあるんですけど、彼女を休ませるとこありませんか？気を失ってしまって」

千冬「ああ、かまわないよ、山田先生保健室に運んであげなさい」

かくして僕たちは一応危機的状況を打破できたのである…

保健室にて…

僕はあることに気が付いたこの学園には女の子しか見当たらない、それともう一つ、見知らぬ間に懐に手紙が入っていた。見てみると…

～これは僕からの些細なプレゼントである、何、ちょっと早い新婚旅行だと思ってね。忍野より、

ＰＳ、困ったら金の指輪ならイザナギと銀ならイザナミって読んだ

らきっと答えてくれるよ。まぁ、無料というわけではないけれどね～

暦「アイツ俺たちをはめやがったねぁ！」

心の中で試しに読んでみた「イザナギ…っと」

僕の体は光に包まれた、そして、甲冑のような武装のような変な機械に包まれていた

千冬「な！なぜ男のお前がＩＳを動かせる」

この機会はＩＳを言うらしい…

暦「分かりません知り合いが書いた手紙の通りにしたらこうなっていました」

織斑さんは考え込んでいる、そんなに男がＩＳを使うのが珍しいのか？

千冬「そういえば、お前達の名前を聞いて今かったな」

暦「阿良々木暦です。こっちが…」

ひたぎ「戦場ヶ原ひたぎです」

暦「お前気が付いたのか？」

ひたぎ「ええ、阿良々木君が光りだした時にね」

暦「お前も心で思ってみろよイザナミって」

ひたぎ（イザナミ…）

ひたぎを中心に光りだす

暦「……」

ひたぎ「なんか言ったら？阿良々木君」

暦「き、綺麗だよ／／／」

ひたぎのＩＳは背中に天使の羽のようなものがあり、全体的に白を強調した機体
である（まだ武装は展開しておりません）

ひたぎ「阿良々木君はなんかボロイ感じね」

そう、僕のＩＳは全体的に戦場ヶ原とは非対称で黒を強調した機体
である（武装非展開）

天の声「想像が付きにくい人は、黒をデスサイス、白をウイングガンダムと考えてくれれば想像できるかと…」

ん？誰かがテンプレなしで説明したような？

暦「そういえば、男がＩＳ？を起動できるのがそんなに珍しんですか？織斑さん」

千冬「当然だろ！ＩＳは女でなくては動かせない、お前常識だぞ！」

暦「そうなんですか？」

ひたぎ「阿良々木君、そろそろ、帰らない？」

暦「帰るったって忍野のせいで帰るとこないしなぁ」

千冬「お前たちに一つ提案があるのだが、三食付きなの快適な物件があるのがだ、どうだ？」

…嬉しいはずなんだが織斑さんの笑顔やけに怖いんだよな…

暦「背に腹は代えられないな、解りました。僕からも条件があります！」

千冬「なんだ？言ってみろ？」

暦「俺、戦場ヶ原を含めて三人部屋を要求したいです」

千冬「何故三人なんだ？二人部屋で充分だろ？」

暦「いえ、もう一人いるんですよ」

そう、忘れてはいけない、僕が怪異に関わって最初で最後の後悔をした元凶、忍のことを…

ひたぎ「見せるの？」

暦「ん？この人は信用してもいいと思うよ、織斑さん今から起こる事は他言無用でお願いします」

千冬「ああ、分かった」

暦「忍」

僕がその名を呼ぶと影から金髪で年齢も幼い少女が出てきた

千冬「な！」

暦「これが三人目忍です。」

忍は殺意こそは無いものの冷たい視線で織斑さんを睨んでいた…

やっちゃったなぁ（後書き）

感想&アドバイスくださいね

試験（前書き）

少ないですがすみません

試験

千冬「どんな手品を使った？」

今起きた現状うに理解ができない織斑さん、仕方がないよな、誰だってこんな登場シーン見せられたら驚くよな…

暦「えっと、ですね…」

かくかくしかじか…。

小説って楽ですね。え？楽しているわけではないですよ？ｂｙ作者

千冬「つまりまとめると、阿良々木と忍野は人ではないと…」

理解に少し…いやとても苦しむ織斑先生…

暦「どうするかな…」

ふと戦場ヶ原に視線が合う…

戦場ヶ原「証拠を見せればいいのよね？阿良々木君？」

戦場ヶ原の質問にいやな予感しかしない暦だが…

暦「そう…だが…」

明らかに嫌な予感がする…

その予感も現実になってしまった…

戦場ヶ原「忍ちゃん？やってくれる？」

戦場ヶ原が忍に聞いてみる…てかそんなに仲良かったっけ？お前ｒ…

その瞬間僕の体はくの字に曲がり保健室く壁にぶつかり崩れ落ちた…

千冬「な！」

五才位の少女の力とは到底思えない蹴り…

戦場ヶ原「これでこの子が少なくとも人間というようように収まらないということが解りましたよね？」

忍は未だに織斑さんの事を睨んでいる…

千冬「それは分かったが、あいつは大丈夫なのか？」

そういい壁に叩きつけられた阿良々木のほうを見るとその壁には赤く大きな花が咲いていたという…

2分後…

暦「痛ー！少しは加減しろよな！忍、あと、戦場ヶ原！いきなりこれはないんじゃないか！死んだらどうするんだ！」

こんな突っ込み気味の返答に戦場ヶ原は…

ひたぎ「あら、貴方なら大丈夫よ…台所にいるGも驚くほどの生命力なんだから」

暦「僕をあんなのと一緒にするなよな」

頭から若干の血が流れていたが極めて元気そうな会話が始まった…

戦場ヶ原「これでお分かりに戴けたかしら？」

千冬「見てしまったのだから信じるしかあるまい？」

今目の前で起こった現状に納得するしかない千冬であった…

プルル…ピ！

千冬「はい…そうですか…わかりました…でわ…」

暦「どうかしたんですか？」

電話の内容が気になる暦…

千冬「お前たちの条件をのむと上から電話があったのだが…」

いかにも何かを企んでいるような笑みを浮かべる千冬…

千冬「私と山田君の二人と実力テストをしてもらう！」

暦「テストって筆記ですか？」

千冬「否、実技でテストだ」

戦うのが楽しみで仕方がない織斑先生に少しオロオロしている山田君…

そんな山田君を見て暦が…

暦「ほんとに先生なんだろうか？」

とボソッと言ったとか言わないとか…

試験（後書き）

感想お待てしています

代償はなんですか？（前書き）

短いです

代償はなんですか？

千冬「ここＩ学園の試験は一つだけだ。訓練機もしくは専用機を使った、試合をしてもらう…」

アリーナへの移動中に説明をする千冬気のせいかその足取りがだんだん早くなっていくのが解る…

暦「相手は誰なんですか？」

千冬「阿良々木は私が、戦場ヶ原は山田君がする」

戦場ヶ原「良いですけど、質問が…先生たちの実力をちょっと小耳にはさんだんですが、先生はＩＳ界で最強だとか…」

千冬「そんなことはないよ、私はしがない教師だ」

何をおっしゃる千冬さんあなたの実力はある意味怪異に匹敵する程でしょ？ｂｙ作者

アリーナ到着…

千冬「さて、始めるか…私はこの打鉄で行く、お前も早くＩＳを起動させろ」

千冬に急かされる暦だが、焦っていた…

暦「機動…できない…なんで？どうして？…さっきはできたのに…」

暦は待機状態である指輪を見ると「ＢＬＯＯＤＯＦＦ」に文字が浮かんでいた…

暦「どういうことだ？」

すると、忍が近づいていき…カプッ…噛みついてきた…

忍お行動に動揺する暦…

暦「何で今僕の血を吸うんだ？忍…」

十秒後…

キン…

指輪から音が出て「ＢＬＯＯＤＯＮ」の文字が浮かんできた…

（このＩＳの軌道キーは俺の血か？）なんてことを考えながらもＩＳが既往出来たことに安心する暦であった…

千冬「何が起こっても驚かないが、武器はあるのか？」

そんな問いに暦は…

暦「使える武器は刀が２本で他はロックが掛かっているみたいです」

千冬「じゃあ、ディスプレイに出た武器に目線を合わせろ」

武器に目線を合わせるとその武器が実体化してできた…その武器を持った瞬間、暦の中にその刀の思念、否、思いや怨念に近いものを

感じた…

忍の事件から怪異に良く遭遇する様になっていた暦にはこの刀の正体がわかった…

暦「戦場ヶ原…」

ひたぎ「何？阿良々木君」

暦「この武器二本とも怪異に近いというか、一つは妖刀でもう一つは神刀みたいだ…」

戦場ヶ原「本当なの？」

暦「間違えない…」

千冬「始めるぞ、準備は良いか？」

暦「はい…大丈夫です…」

（行こうか…妖刀絶、神刀神楽…）

千冬「来たか…」

暦「よろしくお願いします」

千冬「ルールは、相手のシールドエネルギーを０にするか時間切れの際に少なかったほうが勝者とする…なお、これは試験のため勝敗が合否を決するわけではないのが全力でかかってこう！」

そういうと千冬は刀を暦に向けた…

山田「それでは始めてください」

ビーーーー

開始のベルが鳴る…

先に動いたのは千冬だった…

キンッ

千冬の刀と暦の絶がぶつかる…

千冬「ほぅ…私の剣を止めるか…お前は剣を扱ったことがあるのか？」

戦いのさなか暦に聞く千冬…

暦「そんなわけないだろ…ただ、この件の使い方を知っている…いや、知っていたような気がするだけです…よ！」

千冬の質問に答え、一旦距離をとる二人…

暦「今度はこちらから行きますよ」

暦は絶を振りかざし横一線する…

シュ…キン

千冬「何故、収める？まだ終わってないぞ？」

暦「いえ、一回収めないと切れても気付かないみたいなんですよ」

千冬「何を…」

ふと自分のエネルギーの残量に気付く…残量：２５０

暦「絶の抜刀する速さは折り紙つきですが、早すぎて切られた本人にも気づかないほどです…なので一回、鞘に納めないといけないみたいなんですよ」

千冬は暦の説明を聞いて…

千冬「ふ、面白い！どれ、私も本気でやってみたいな」

暦「あはは（汗）」

千冬の発言に笑うしかできない暦であった…

代償はなんですか？（後書き）

感想お待てしています

戦闘開始（前書き）

短いですがどうぞ

戦闘開始

千冬「はぁぁぁぁ！」

千冬が刀を盾に振りぬく…

暦「くっ…」

それを神楽でいなし、絶を横一線する…

千冬「チッ」

それを千冬が防ぐ…

キン…ジッ…

二人の間合いが重なって刀同士がぶつかるたびに青白い火花が飛ぶ…

山田「織斑先生は相変わらず凄いですけど、それと対等に戦っている彼も凄いですね」

かれこれ、1時間以上はこの戦いは続いている、だが、二人のエネルギーは風前の灯に近い…この戦いに終わりが来たのだ…

千冬「なかなかやるじゃないか」

距離を置き話し出す…

暦「そんなことないですよ…あれ以来絶の攻撃が当てることができ

ないのですから」

続いて話し出す…

暦「これが最後です！」

千冬「良いだろ受けてやろう」

再びつばぜり合いになる二人…

千冬「このままだと力押しで私が勝ってしまうぞ？」

暦「大丈夫ですよ…「インパクト」…」

ドッン…

アリーナに響く爆発音…土煙のせいで二人の姿が確認できないが、暫くすると、一人の人影は現れた…現れたのは…

「僕の勝ちでいいですよね？」

暦だった…

千冬「お前の勝ちだ、それと、最後のは一体なんだ？確か、インパクトだったな？」

暦「あれは僕の機体に蓄積された貴方のエネルギーです、戦っている最中に気が付いたのですが、この刀、絶は食いしん坊で触れた相手のエネルギーを食べる（吸収）していまうんですよ。織斑さんもたった一撃であそこまでのダメージ考えられないでしょ？」

千冬「成る程…絶で吸収したエネルギーを神楽が出す、そういう原理だな？」

暦「そうですね、たぶんこの武器は二本で一つなんだと思います」こうして暦の試験は終わりを迎えた…

山田「織斑先生が負けるとこ初めて見ました」

今の現状に驚く山田先生…

千冬「長引いてしまったな、次山田先生たちだ」

試合から帰ってきた千冬からの指示を聞いて席を立つ山田先生

山田「さぁ、行きましょうか、戦場ヶ原さん」

戦場ヶ原と一緒に移動する山田先生…（近くで見たら姉妹に見えるな、しかも戦場ヶ原は姉で…）

なんてことを思う暦であった…

山田「さぁ、始めましょうか、戦場ヶ原さんもＩＳを展開していください」

そういい、ラヴァールを展開する先生…

ＩＳを展開しようとしたひたぎに焦りが出る…

ひたぎ「展開ができない…」

ひたぎも暦と同じで展開ができないのだ…ふと、自分の指輪に文字が浮かんできたのを気付くひたぎ…

ひたぎ「なるほど、忍野さんも意地悪ね…」

そこには「ｇｒａｖｉｔｙｏｎ」の文字が浮かんでいた…

ひたぎ「また、私から重さを取ろうっていうのね…良いわ、取なさい！」

カチ…。

「Ｇｒａｖｉｔｙｏｆｆ」の文字が出てきて、ひたぎは日からに包まれた…ＩＳの展開に成功したのである…

ひたぎ「また、あの感じね…でも、前よりは悪くない感じね」

山田「それじゃぁ、武装の確認せてください」

確認に移るひたぎ…

ひたぎ「！…あの、武装ってどれくらい持つことができるのですか？」

山田「そうですね…平均はＩＳによりますが４．５個くらいだと思いますよ？」

ひたぎ「そうですか」

ひたぎの武装一覧には接近戦の武器はパイルバンカーだけだった…
中距離遠距離武器はというと…

ひたぎ「軽く15以上あるんですけど」

だそうです…

ビーーー。

千冬「それでは始めてくれ」

こうして戦いは始まった…

戦闘開始（後書き）

感想お待ちしています

ケルベロス（前書き）

すみません…スランプ気味なんで本当にに少ないです

ケルベロス

山田「では失礼して」

ダッ！

山田先生が構えてすぐに短くそして乾いた音が聞こえた、刹那。撃った弾が足の装甲に被弾、体制が崩れるひたぎにグレネードを投げ畳掛ける山田先生。

舞いやがった砂埃が消え去りそこにはひたぎの姿はなかった。

ひ「案外、弾丸の速度も遅いものね」

キュィィィン…バララララ…

何かが回転する音と無数の音がアリーナに響き渡った。

や「あたた…どうやって私の攻撃をよけたんですか？それと…その武器はなんですか！」

ひ「私のＩＳは速度と火力を追求したみたいなので、速度を生かしてグレネードをよけたにすぎません。それとこの子の名前はケルベルスです。立派な銃器だと思いませんか？」

自慢するように話す。

や「少なくとも私の経験上、ガトリング砲が三つもついている銃なんて見たことがありませんよ！」

ただいまのエネルギー残量

山田、５００

ひたぎ、１０００

千「お前の彼女は反則だな、お前も含めて」

阿「返す言葉もないです」

視点はアリーナに代わりまして…

や「仮にも私は先生です。諦めません！」

山田先生はライフルを戻しアサルトに代える。

「遅いですよ」

山「な！」

背後から声が聞こえ振り向くとケルベロスを構えているひたぎがいた…

キュィ――――ン

バララララ…

モータの回転音を弾の乾いた音がアリーナに響く…

何百、何千の弾が山田先生をを襲う…

山「きゃぁぁ」

ビーーー…

千「試験終了」

結果はひたぎの勝利に終わった…

ケルベロス（後書き）

ごめんなさい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9145x/

IS怪異を追ったらここにいた

2011年12月17日21時47分発行